

報告概要「今なぜ日 EU 協力が 欧州を使う新たな視点」

防衛省防衛研究所研究部教官
鶴岡路人

従来の日 EU 関係には真剣味が欠けており、「協力のための協力」という側面が強かったことも否めない。10 年前の共同宣言で触れられていた「いまだ満たされざる潜在性 (untapped potential)」は、10 年経った現在でも、いまだに満たされていないままである。しかし、EU は、国際社会において様々な側面で「マターする」ようになってきているということを明確に認識して対 EU 関係を検討していくことが必要である。その際、双方にとって有益な関係を構築することが重要なのであり、互いに「使える」相手としていくことである。そのためには双方の比較優位を踏まえる必要がある。

EU が「マターする」理由としては、経済力の政治力への転化、規範主義的傾向や（多国間主体であることによる）対外姿勢の硬直性がある。前者は、FTA 等の経済関係において政治的条件付けを伴ったりすることにつながり、後者はある意味で単独行動主義的とも言える対外行動を見せることにつながっている。

日 EU 政治・安全保障協力は、従来、「問題のないことが問題だ」（パッテン元欧州委員）とも言われ、真剣な安全保障問題協議に繋がってこなかった。今日では、促進要因と阻害要因を整理すると以下ようになる。即ち促進要因としては、9.11 テロの発生やそれに伴う国際安全保障問題のグローバル化、CFSP や ESDP の発展に伴う国際安全保障における EU の役割の拡大により日 EU の活動・関心領域の重なりあう部分の増加、経済摩擦の収束、基本的価値の共有等があり、阻害要因としては、日本における絶対的・相対的な EU 軽視などがある。

こうした現状を踏まえた、EU 活用の方向性は以下の通りである。まず、国際政治上、一定の発言力を有する EU との政治・外交上のパートナーとして関係を構築すべきである。その他、国際平和活動等における実際の活動に際して現地での協力相手となることが多い EU（諸国）との平素からの連携・協力、治安部門改革（SSR）等、ソフト・セキュリティ分野での協力、さらには「非米」の協力相手の選択肢として EU を持つておくことも有意義である。このようにして、「協力のための協力」ではない、目的志向・政策志向の関係を構築することが重要である。

文責：小林正英（尚美学園大学）。報告者による了承の上、掲載。